

インドネシアで生活を共にしたネコたち

彼らも私たちを仲間として受け入れて寄り添ってくれました。時にはおかずを狙われ、いろいろ汚され、ケンカもしたけれど、困難を乗り越えてできた絆は、私たち4期メンバーと同じです。



2025年度 西尾市青年国際ワークキャンプ派遣事業

主催



西尾市市民部地域つながり課

〒445-8501 愛知県西尾市寄住町下田22番地
TEL | 0563-65-2178 FAX | 0563-56-2175
Email | kouryu@city.nishio.lg.jp

実施事業者



西尾市国際交流協会

〒445-8501 愛知県西尾市寄住町下田22番地(地域つながり課内)
WEB | <https://nishio-nia.jp/>



特定非営利活動法人NICE(日本国際ワークキャンプセンター)

〒245-0061 神奈川県横浜市戸塚区汲沢8-3-1
Email | gw@nice1.gr.jp WEB | <https://www.nice1.gr.jp>



合宿型のボランティアでリアルな国際感覚を養う



国際ワークキャンプ

西尾市青年国際ワークキャンプ派遣事業とは

世界の地域課題に対し、現地の住民と共に活動する合宿型のボランティア(国際ワークキャンプ)に西尾市内の青年を派遣することで、派遣先国の青年と共に活動しながら交流、切磋琢磨することを通じ、将来の西尾市を担う豊かな国際感覚を身に付けた青年を育成することを目的とした事業です。

派遣期間 2025年8月25日(月)～9月4日(木) 計11日間

派遣先 インドネシア国西ジャワ州バンドン。活動地は首都ジャカルタ市内のスカルノ・ハッタ空港から車で約4時間の距離、チタルム川沿いのローカルエリア

- 活動内容**
- ボートに乗って川に浮かぶゴミの回収作業。川沿いのごみ拾いや分別作業
 - オーガニック肥料づくり。コーヒーの苗木の植林作業
 - 環境問題及びイスラム文化に関する意見交換
 - 水草を使ったハンドクラフト体験
 - 現地の小学校やJapanese dayでの日本文化および日本食の紹介

宿泊場所 現地コミュニティにて環境保全活動を行う団体の宿泊施設。竹でできた高床式の建物(男女別棟)。持参した寝袋で就寝。食事は朝晩のみ現地コーディネーターと共に自炊。食材は現地の露店で調達。



団員4期生

大葉 凌也 | 大学2年 田中 美羽 | 大学4年 杉浦 諒 | 大学2年
 梶山 実咲 | 大学1年 田中依歩希 | 大学1年 小木曾さくら | 大学3年
 プトリナオミ | 大学3年 恵良 心南 | 大学2年 柘植大介 | 大学3年

引率 大竹 美鈴 井口 育紀
 西尾市 市民部 地域つながり課 特定非営利活動法人NICE

西尾市長からのメッセージ

本年度の「西尾市青年国際ワークキャンプ派遣事業」は第4期目にして、初めてインドネシアへの派遣となりました。

派遣された9名の帰国報告では、現地でインドネシアの方々と共に生活し、言語、食、文化の違いを肌で感じただけでなく、「日本の当たり前が世界の当たり前ではない」といった気づきを得たことが伺えました。彼らが国際感覚だけでなく、物事を多角的に見る力も養い、視野を広げたように思います。派遣する側として、本事業を実施した意義を非常に感じています。

今後も、9名が同世代の若者を巻き込みながら、多様な価値観を尊重できる多文化共生社会のキーパーソンとして、西尾市で活躍してくれることを期待しています。



なかむら けん
中村 健
 西尾市長

2025年 事業スケジュール

出発前 5/1~23 | 申込期間 6/2~3 | 選考(面接・書類)
 6/28 | 事前研修① 7/6 | フィールドワーク 7/27 | 事前研修② 8/18 | 事前研修③

	AM	PM	Night
1日目 8/25 Mon	中部国際空港 集合	中部国際空港出発	スカルノ・ハッタ空港 到着 ジャカルタ市内宿泊
2日目 8/26 Tue	ジャカルタ市内 出発	活動地 到着	ウェルカムディナー
3日目 8/27 Wed	オリエンテーション	滞在先・地域紹介	ミーティング
4日目 8/28 Thu	ボートで川のごみ拾い	環境に関する講義・意見交換	ミーティング
5日目 8/29 Fri	川沿いのごみ拾い	イスラム文化の講義 オーガニック飼料づくり	ミーティング
6日目 8/30 Sat	フリーデー (バンドン市街地を散策)		
7日目 8/31 Sun	ハンディクラフト作り	中間振り返り ジャパニーズデー準備	ジャパニーズデー
8日目 9/1 Mon	フラッグセレモニー見学 小学校訪問	園児と苗づくり・植樹作業	ミーティング
9日目 9/2 Tue	川沿いのごみ拾い ハンディクラフト作り	最終振り返り お別れパーティー準備	お別れパーティー
10日目 9/3 Wed	掃除	活動地 出発 スカルノ・ハッタ空港 到着	スカルノ・ハッタ空港 出発
11日目 9/4 Thu	中部国際空港 到着/解散		

帰国後 9/19 | 事後研修/帰国報告会



世界一汚い川と呼ばれている Citarum River チタルム川

チタルム川は長さ300kmの西ジャワで最も長い川。農業、漁業、発電、生活用水など、3000万人もの人々の生活に根づく川だが、急速な経済発展により、川沿いに並ぶ200以上の織物工場からの鉛、水銀、砒素などの化学物質は川を汚染し、ふもとに住む500万人の人々への影響は特に大きい。今も川の汚染は進み、プラスチックなどの自然に還らないごみが多く見受けられ、世界で最も汚い川の1つに数えられる。

そこで、2015年にチタルム川保全のために“Yayasan Bening Saguling”という地元の団体が、発足。教育活動、環境保全活動などを通して、地域の持続的な発展に取り組んでいる。川に繁殖する草を使ったハンディクラフトで、特産物の製作にも力を入れている。私たちが宿泊した場所もこの団体が管理する施設。

インドネシアでの受入NGO



GREAT Indonesiaは、2015年設立のインドネシアの国際ボランティアNGO。1999年に設立したインドネシアの国際ボランティアNGO「IIWC」の元職員と元会員が中心となって発足された。本事業を第1回目から受託するNICEとも緊密に連携しワークや運営の質が、多くのボランティアから高く評価されている。



Gangga
ガンガ

朝食・夕飯作り、ボランティアワーク、夜のミーティング、フリーデイの準備など、インドネシア滞在中ずっと私たちを支えてくれた2人！日本の音楽やアイドルの話で盛り上がりがあったり、夜中まで語ったり。

2人も第4期の大切な一員です。10日間ありがとう！



Delia
デリア

滞在先でお世話になった人



Mr. Indra Darmawan
インドラさん

団体として行っている環境保全や教育支援の取組、イスラム文化の話をしていただきました。



Mrs. Tati Mulyati
ウミさん (Umi)

毎日昼食を作ってくださり、私たちの活動のサポートもしてくれたみんなのお母さん。愛称のUmiはアラビア語でお母さんという意味です。

滞在最終日には、プラスチックごみからリサイクルされた資材ボードに団員・引率者からのメッセージを貼ってお渡しました！



海外派遣前の活動 — 事前研修&フィールドワーク

ワークキャンプを成功させるために、事前研修を3回、フィールドワークを1回実施しました。今回は、初めてイスラム文化の国に派遣されるということで、日本文化紹介をどうするか団員同士で話し合いながら悩みながら準備を進めました。第1回目の研修では緊張していたメンバーも研修を重ねるごとに打ち解けていきました。

事前研修 1 6月28日

- ・顔合わせ、自己紹介
- ・ワークキャンプ、旅行手続きの説明
- ・期待の共有と不安の解消
- ・懇親会



フィールドワーク in 佐久島 7月6日

- ・ハラール料理作り
- ・企画準備(Tシャツ作り/Instagram投稿/日本文化紹介)
- ・佐久島散策



事前研修 2 7月27日

- ・西尾市国際交流協会の日本語教室を見学
- ・インドネシア人学習者との交流
- ・モスク訪問
- ・ハラールランチ交流会
- ・アクティビティ企画準備(Tシャツ完成!)
- ・過去の派遣団員との交流会



事前研修 3 8月18日

- ・渡航前の最終確認(アクティビティ、持ち物など)
- ・ワークキャンプの目標設定&発表
- ・ピザの取得手続き
- ・懇親会



インドネシアでの生活 — 宿泊施設 & 食事

私たちが宿泊したのは竹で作られた簡素な小屋でした。男女別の小屋で、マットレスの上に寝袋を敷いて並んで寝ました。トイレは水洗でしたが、トイレトイレットペーパーを流すことはできません。インドネシアではトイレトイレットペーパーの代わりにトイレ専用のシャワーを使います。お風呂場には蛇口とバケツだけがありました。お湯は出ません。毎日水浴びの生活でした。初めは戸惑っていた団員も徐々に慣れていきました。

宿泊施設

竹でできた小屋！
寝袋持参で寝ました



女子部屋！



トイレは水洗ですが
紙は流せません



シャワーや温水はありません
水をすくって浴びます

ミーティングルーム！



屋外で
食後の食器洗い！



キッチン！

限られた調理道具で
朝食と夕食は自炊でした



食事

みんなで輪になって食事



昼食は滞在先のオーナーさんが
用意してくれました



サンバルという辛いソース！
手作りで美味しかった



食材を露店で調達しました
包丁とまな板は無く、
小さなナイフで調理！



手で食べることも挑戦！
意外と難しい...



インドネシアでの生活 — イスラム文化・お祈り・子どもたちと交流

お祈り

イスラム教徒の皆さんは1日に数回のお祈りの時間があります。滞在中、希望者のみ早朝4時半からの祈りに参加しました。滞在した地域では、基本的には男性がモスクでお祈りし、女性の多くは家(部屋)でお祈りをしていました。これは、男性優位の考え方ではなく、女性に負担をかけない、女性は守るべき存在というイスラムの教えです。

金曜はイスラム教にとって特別な日
大きなモスクで男性のみが
集まってお祈りをします



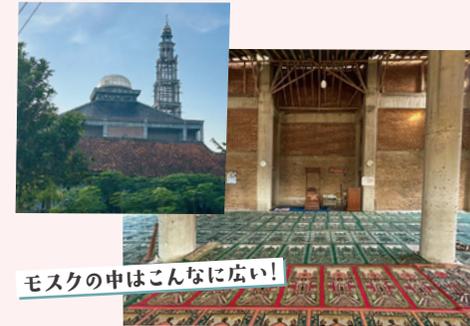
小さい子どもたちも
一緒にお祈りに参加



希望者のみ早朝4時半からの
お祈りに参加



モスクの中はこんなに広い！



金曜日以外は
地域のモスクでお祈り



青年たちや 子どもたちと交流

毎日のボランティアワーク後、食事作りなどの合間に現地の青年や子どもたちと交流しました。お互いに英語はカタコト。身振り手振りでコミュニケーションを取りながら一緒に遊び、交流しました！



けん玉やコマを紹介したり



サッカーや「だるまさんが転んだ」も！



🍃 ボランティア作業

川で
ごみ拾い

ボートに乗り、チタルム川でゴミ拾い。プラスチック容器やビニール袋、衣類や靴、カバン、川の水を吸ったオムツなど、生活ゴミが水面に広がっていました。手作業で水面に浮いているゴミを拾い、ボートに乗せていく...拾っても拾ってもゴミは減りません。その後、川岸のゴミ拾いも。暑さと戦いながら、とにかく目の前のゴミを拾い続け、その後は分別もしました。

目を疑うほど
水面に広がる様々なごみ



川沿いのごみも
ひたすら拾い続けます...



回収したごみは
きちんと分別しました!



きれいになりました...!!!

分別されたごみは...

洗浄後に粉碎し、資材ボードにリサイクルされます。看板や階段に使用され、資材ボードで建てられた家もありました。今後は被災地でもこの資材ボードを活用したいとのことでした。このほか、Yayasan Bening Sagulingでは、授業料や薬代の代わりにプラスチックゴミを回収するといった貧困層の支援も行っていました。



資材ボードで建てられた家



幼稚園授業料の代わりにごみ回収

オーガニック
肥料作り

生ごみを発酵させて、蛾の幼虫を育て、幼虫は飼料や肥料となり、循環していきます。私たちは肥料作りの作業を行いました。生きている幼虫たちにも触りましたよ!



調理して出たごみも
生ごみコンポストへ



川の水草で
クラフト体験

乾燥させた川の水草を編み込み、プレスレット、フォトフレーム、かごなどをそれぞれ作りました。根気のある作業で時間はかかりましたが、とても良い記念品ができあがりました!



幼稚園児と
苗づくり&植樹

子どもたちと土をすくって苗を作る作業をしました。その後、コーヒーの木を全員で1個ずつ持ち、チタルム川沿いに植樹しました。



ごみ問題について
ディスカッション

大学の先生からマイクロプラスチックに関する講義を、私たちからは西尾市のごみについてプレゼンをしました。インドネシア語ができる団員ナオミが通訳してくれました。



ごみ減量課の出張講座で
学んだことを活かしてプレゼン!



🌍 SDGsの観点から見た本事業



川のごみ拾いなどの環境保全活動を通じて、貧困層の教育や医療の支援を行う団体の取組に寄与しました。



自分の常識や当たり前が通用しない世界を経験することで、国際感覚を身につけた青年を育成し多文化共生の社会を目指します。



現地の住民と生活や活動を共にするワークキャンプを通して、多様な価値観や文化の違いを学び、共働を目指します。



🍃 日本文化紹介

Japanese day

事前研修中から企画し日本から持参した持ち物等で、夏祭りの縁日をイメージしたジャパニーズデイを現地の方々に向けて開催しました。習字、浴衣の着付け、うちわ作り、ヨーヨー釣り、お菓子を箸で取るゲームコーナーを子どもたちや青年たちに体験してもらい、カレーライス、おにぎり、チョコバナナなどの日本食も振舞いました！



お別れパーティー

天ぷら、おにぎり、白玉だんご、グリーンティーなどの日本食を振舞いました。油が不足するなどのハプニングもありつつ、協力しておもてなしました！



学校訪問

近くの小学校を訪問し、みんなでラジオ体操をした後、教室で習字、折り紙、浴衣の着付け、コマ、お菓子取りゲームを体験してもらいました。



🍃 フリーデー — バンドン市街地

バンドン市街地

バスで約2時間揺られ、バンドンの市街地まで行きました。まずはレンバン公園というテーマパークへ。水上マーケットでドリンクや軽食を楽しんだり、買い物をしたり。巨大な滑り台にも挑戦！その後は有名なショッピングモールやカフェなどがある街中を散策。途中でスーパーにも立ち寄り、日本文化紹介に必要な食材を購入しました。



西尾市国際青年ワークキャンプ派遣団 公式Instagram

派遣された団員の自己紹介、現地での活動の様子、帰国後の活動の様子などを発信しています。ぜひ、チェックしてください！



@nishio_workcamp

1~3期生の活動も投稿されています！



1期生 フィリピン共和国 バンパン村
2期生 ベトナム社会主義共和国 ブオック村
3期生 フィリピン共和国 トゥプラン市

帰国後の活動

10月25日

NICE国際
ボランティア大賞



団長りょうやが東海大会の
ボランティア部門で優勝!

12月2日

吉良ライオンズクラブで
体験談報告



吉良ライオンズクラブの会合で
体験談の報告を行いました

12月10日

西尾高校
訪問



高校生たちに向けて
ワークキャンプ体験談を報告



久しぶりにみんなで集合
NICEのやすさんも!

12月26日

アジアメニュー
給食試食会へ参加



26年9-10月のアジア競技大会に向けて
給食でアジアメニューが取り入れられることに
インドネシアのチャーハン「ナシゴレン」も試食!



事前研修で交流したモスクへ
帰国報告に行きました!



メンバー
ミーティング



なかなか全員集合は難しいですが
何度か今後の活動を話し合うことも



団員それぞれの思い出の写真を集めて
4期のパネルを作りました!

人とのつながり
世界のひろがり

Ibuki

出合いが
人生を
変える

Kokona

言葉では
なく心で

Makoto

心でつながる

Sakura

知らなかった
自分や世界が
好きになる瞬間

Ryoya

笑顔は世界共通言語

Daisuke

Terima kasih semuanya!
みんな、ありがとう!

Naomi

団員エッセイ

Essays by members

10日間程のインドネシア生活。

何を体験し、何を感じたのか。

それぞれの思いをエッセイに

綴りました —

わかると
かわる

Misuzu

文化って
おもしろい!

Misaki

This is
the workcamp!

Yasu

世界の広さを感じた
11日間

Miu



えら ここな
恵良 心南

インドネシアでのボランティア経験を生かして、成長していきたい! 最高の経験! 素敵な思い出!



かけがえのない宝物

何も代わり映えのない日常から離れて、異文化の中で実際に生活し、現地の人々と関わる経験を通じて自分の視野を広げたいと思い参加しました。初めて訪れる国での生活は、見るもの聞くものすべてが新鮮で、毎日が冒険のように感じられました。活動を通して地域の人々と一緒に汗を流し、笑い合う中で、文化や言葉の違いを超えてつながれる喜びを実感しました。また、環境保全や子どもたちとの交流を通じて、自分の価値観を広げ、これからの生き方について考える大きなきっかけにもなりました。現地での体験や出会いを振り返り、心に残った学びや気づきをここで伝えていきたいと思っています。

インドネシアでの生活は、日本での暮らしとは大きく異なり、新しい発見の連続でした。朝は鶏の鳴き声やモスクから流れる祈りの声で目を覚まし、簡素な宿舎で仲間と一緒に一日を始めます。シャワーはなく、桶にためた冷水で体を流すような生活でした。日本のように、温かい水が簡単に出てくるのが当たり前ではないことを身に染みて感じました。食事は、現地の家庭料理、露店や屋台のもので、スパイスの効いたナシゴレンやバリバリなせんべい、美味しくて辛いサンバルなどを食べました。日本人の口に合いそうなものが多かったのが印象的です。特に食事について困ることはなく、3食美味しく、お腹いっぱい食べることが出来ました。

日中は、炎天下の中での作業や子どもたちとの活動

に汗を流し、夕方になると現地の方たちが集まり、笑顔と笑い声があふれる時間を過ごしました。言葉が通じない場面もありましたが、心に残る貴重な日々となりました。



川掃除では見たこともない景色に驚きました。インドネシアでの川のゴミ掃除に参加して、改めて環境問題の深刻さを実感しました。川にはペットボトルやビニール袋、発泡スチロール、オムツなど多くの生活ごみが流れ着いており、現地の人々の生活と環境が密接につながっていることを強く感じました。また、地元の人ではなく、都会から流れ着いたゴミだと聞いてとても悲しい気持ちになりました。

作業は暑さや臭いもあって大変でしたが、仲間と協力しながら一袋ずつゴミを回収していく中で、少しずつ川岸がきれいになっていく様子を見られたことは大きな達成感につながりました。また、現地の方たちが「ありがとう」と声をかけてくれたことが印象的で、自分たちの行動が小さくても確かに誰かの役に立っているのだと実感しました。同時に、掃除だけでなく「ごみを肥料や建設物に変える仕組みづくり」や「環境教育」についても学びました。また、ゴミ1キロで学校の授業料の代わりになったり、クリニックの薬代になったり、日本では考えられない取り組みが数々ありました。

今回の体験から、環境保全は一人ひとりの意識と行動の積み重ねによってしか実現できないことを教えられました。今後も自分の生活の中で環境に配慮した行

動を心がけていきたいです。

また、私が特に印象に残っているのは、現地の方たちのフレンドリーさ温かさです。私は大学の専攻が国際的な分野と全く関係がなく、英語すらまともに使えないままの参加で不安だらけでした。それに加え、現地の子どもたちは英語が通じない子が多く、コミュニケーションを取ることに苦戦したのを覚えています。

しかし、すれ違った時に名前を呼んで笑顔で手を振ってくれたり、写真撮ろうよと声をかけてくれたり、スマホの翻訳機能を使って質問をしてくれたり私たちにすごく興味を持ってくれました。元々、人とコミュニケーションを取ることが好きなので、言葉だけでなくジェスチャーも使って相手に寄り添うことによって、子どもたちともすぐに打ち解けることができました。学校訪問の際、「ここなー!」とニコニコで手を広げて駆け寄ってきてくれたこと、私が目を腫らした際に、「どうした? ここなは笑顔が似合うよ。笑って。」と翻訳機能を使って伝えてくれたこと、別れの際、プレゼントを渡してくれ、一人一人とハグをしたこと、今でも忘れられません。彼らの素直さや思いやりに触れることで、人と人とのつながりの大切さを改めて感じました。

インドネシアでのワークキャンプは、私にとって忘れられない大切な経験となりました。文化や言葉の違いに戸惑いながらも、現地の人々と心を通わせ、仲間と協力しながら活動をやり遂げた時間は、かけがえのない宝物です。また、このメンバーだからこそ乗り越えられたことも多く、この出会いに感謝しています。別れのときの寂しさや、もっと一緒に過ごしたかったという思いは今も胸に残っていますが、その余韻があるからこそ、この経験をこれからの自分の力にしていきたいと強く感じます。ワークキャンプで学んだことを日常や将来に活かし、さらに新しい挑戦へつなげていけるよう、一歩ずつ前に進んでいきたいです。



たなか みう
田中 美羽

趣味は登山です! 日本、世界中をキャンプで回りたいです!



一歩踏み出して見える世界の広さ

このワークキャンプを通して、現地の方と交流し同じような生活を送ることで、外国人に対する意識が変わり、また自分自身の興味や関心が広がったと感ずます。さらに日本からともに派遣されたメンバーとの活動を通して、自分自身が成長する機会にもなったと感じています。

ワークキャンプの中で最も印象的だったことは、現地の人々がとてもフレンドリーだったことです。自分自身コミュニケーションに自信がないため、現地の人とどう接すれば良いのかわからず不安な気持ちで到着しました。しかし、活動場所に着くとすぐに子ども達が手を振って迎え入れ、興味津々に話しかけてくれたことに驚きました。

特に、子ども達との関わりの中で、趣味の話をしたことが印象に残っています。その理由は、勉強が趣味と答える子が多くいたからです。日本人にとって勉強はやりたくないことと捉えられることが多いと感じており、自分自身勉強はやらなければならないものと思って過ごしてきました。子ども達の中には「将来日本の大学に行きたい」という子もいて、日本について知りたいと、私たちにたくさん質問をしてくれました。興味や疑問に対して積極的に知ろうとする姿に、学ぶことへの姿勢を見つめ直す機会になったと感じています。また学校やお祈りの時間以外は、私たちと一緒に遊んでくれたり、家事やお店の仕事を積極的に手伝ったりと、のびのびと生活しているように見えました。これまで勉強することを中心



に考えてきましたが、彼らと過ごすことで生活を充実させることの大切さを教えてもらったように感じます。

子どもに限らず大人の方とそれぞれの文化や流行について語り合えたことも強く印象に残っています。Japanese dayで浴衣を体験してもらった時、ただ着るだけでなく「どのような時に着るの?」と質問してくれたり、インドネシアの伝統衣装を試着させてくれたりとお互いの文化を紹介し合えたことが嬉しく、ワークキャンプでしかできない体験だと感じました。



また、今回のボランティアワークであるチタルム川の清掃を通して、ゴミ分別の大切さを実感しました。日本ではあり得ない川の光景には衝撃を受けました。正直、川の掃除がしたくて応募したわけではなかったため、最初は知らない土地の川掃除に対するモチベーションは高くありませんでした。しかし、現地の大学教授によるマイクロプラスチックゴミ問題に関する講義や、滞在先の施設のリサイクルシステムに関して学んだことを通して、ゴミ問題は他人事ではないと実感

しました。それらを学んだ後に行った掃除では、川岸を埋め尽くすほどのゴミがあった場所を、地面の土が見えるまで全員が一生懸命掃除を行いました。この時の感動と達成感は一生涯忘れません。

そして、日本から派遣されたメンバーとJapanese dayの前日にワークキャンプへの向き合い方を本音で話し合ったことも、このワークキャンプでの大きな思い出です。事前研修の時から全員が自分の気持ちを強く主張し合えずにスタートし、ワークキャンプ前半はプログラムの流れに任せて時間が過ぎてしまっていました。自分たちで作り上げるJapanese dayに向けてもう一度話し合ったことで、ただ楽しいだけで終わらない、達成感が得られたように感じます。自分自身、思いを人に話す経験は、一歩踏み出す勇気に繋がったと感じます。私の気持ちを受け止め、真剣に考えてくれた仲間がかけがえのない存在です。本当に感謝しています。

私は以前から海外で活動がしたい、また自分自身を成長させたい、という気持ちがありながらもなかなか踏み出せずにいました。このワークキャンプを通してどちらも実現することができたと感じています。そしてまだまだ知らない世界がたくさんあることに気づかされ、これまで以上に海外への興味が高まっています。もっと早く参加していれば良かったとも思いますが、このように感じられているのも4期生の一員としてインドネシアに行けたからだと感じています。このワークキャンプで得た感情や学びは、共に現地で活動した11人にとどめず、西尾市の人々や自分の周りの人に伝えていきたいと思います。また西尾市におけるゴミの問題や外国人との関わり方について、今回の経験を活かしていきたいと思います。



すぎうら まこと
杉浦 諒

初めての海外でバンドンに行けてよかったです!!
また行きたいな～

言葉ではなく心で

私は、元々積極的に人に話しかけたり、初対面の人とコミュニケーションを取ることが得意ではありませんでした。今回、ワークキャンプに参加した動機は、そんな自分を少しでも変えたいという思いからです。

自分にとって、このワークキャンプは初めての海外で、渡航前は期待よりも不安のほうがずっと大きかったです。現地での生活は、シャワーの代わりにバケツに貯めた水をかぶるスタイルだったり、トイレはトイレトペーパーが流せなかったり、日本での生活とは大きく異なっていて、その生活に慣れることができるか、コミュニケーション面でも現地は英語が伝わらない人も多く、どうやってコミュニケーションを取っていくのか、考えれば考えるほど不安が募るばかりでした。

しかし、実際にインドネシアに着いて日本では見られないような街の様子を目にしたり、現地の方々が私たちのことをとても温かく笑顔で出迎えてくれたりしたことで、不安が吹き飛びこれからどんな楽しい経験ができるのだろうというワクワクした気持ちに変わりました。

そんな中、今回のワークキャンプで1番心に残った思い出は、現地の子どもたちとモスクへ行ったり、一緒にフットボールをしたりしたことです。子どもたちは基本的に英語が通じず、初めはコミュニケーションを取ることにも苦労しましたが、ジェスチャーを使ってコミュニケーションを取ろうと頑張ったり、一緒にスポーツをした

りしていく中で、仲よくなることができました。言葉が伝わらなくても仲よくなりたい、自分の気持ちを伝えたいという思いさえあればコミュニケーションを取ることができる実感し、自分から積極的にコミュニケーションを取ることへの不安が無くなっていきました。



他にも、現地のみなさんへ日本の文化を紹介するJapanese dayというイベントを企画したことも心に残っています。私は箸を使ってお菓子を掴むゲームの担当をして、箸の使い方を教えました。とても楽しそうに遊ぶ姿や大人も子どもも関係なく「もう一回やりたい!」と積極的に楽しむ姿を見て、自分ももっと積極的に行動しようと考えようになり、その結果、現地のみなさんと仲を深めることができました。

今回のワークキャンプでは、言葉の壁や文化や生活習慣の違いなど、いろいろな壁にぶつかりました。しかし、そのたびにメンバーや現地のみなさんに支えられながら一つ一つ解決策を見つけて、乗り越えていくことができました。この経験は自分の殻を破り、大きく成長するきっかけになっただけでなく、自分が持っている偏見や固定観念などを取り払うことにもつながりました。このような経験をさせてくれたメンバーやインドネシアのみなさんとのつながりを大切に、今回得た経験や価値観を様々な場面で活かしたいと思います。そして、西尾市の多文化共生社会の発展に貢献していきたいです。





すぎやま みさき
椋山 実咲

メンバーの中で一番年下です！
たくさんの経験を積んで、将来は
小学校の先生になりたいです！



文化を知る入口

ワークキャンプからあつという間に月日が流れていきますが、今でも私の心の中には活動中に会った皆さんの素敵な言葉たちが、思い出を蘇らせてくれます。そのいくつかを一紹介したいと思います。

Terima kasih ありがとう

私が人生で初めて口に出したインドネシア語です。そして、ワークキャンプでいちばん使った言葉です。駅の飲食店の店員さんに対して、はじめてこの言葉を口にしたときのドキドキ感が、今でも心に残っています。ワークキャンプが終わりに近づくにつれ、さらに多くのTerima kasihを自然と口に出すようになりました。バイクだらけで狭い道を長時間運転してくれたドライバーさん、洗濯物干しロープを張るのを手伝ってくれたり、Japanese dayやfarewell partyでふるまう日本食作りを手助けくれたりしたウミやウミの家族。たくさん遊んでくれて、写真を一緒に撮ってくれて、ときどき自分で勉強した覚えたての日本語を話してくれて、最後にはかわいいギフトをくれた子どもたち。ゴミ拾いやゴミの仕分け、肥料づくりやコーヒーツリーの植樹について説明してくれて、わからないことをすぐに教えてくれた地域の人たち。何度もワークキャンプの計画を考え、インドネシアの言葉や文化を教えてくれたり、困ったことの相談に乗ってくれたり、体調を気遣ってくれたり、食事作りを助けてくれたりしたコーディネーターさん。

ワークキャンプを通じ現地の人との暖かさ、優しさに触れるうちに、自然とありがとうの気持ちを口に出さずにはいられなくなりました。Thank youよりも、ダイレクトに思いが伝わるような感覚がしました。現地で1日に伝えるTerima kasihの数は、日本での1週間で伝えるありがとうの数よりも多いくらいでした。

Sama sama どういたしまして

この言葉の意味に気が付いたのは、ある出来事がきっかけです。はじめは、ありがとうに対する単なる返事なのかなと思っていました。Japanese dayで時間ができて、思いつきで子どもたちと折り紙を折っていた時のことです。英語を使わない子たち相手に、お手本を見せながら説明していると、ときどき“Sama?”と聞かれるようになりました。「左側は右側と同じ折り方を繰り返すの?」のようなことを聞いていたようで、その時になってようやく“Sama sama”の“Sama”は「同じ」という意味なのだと理解しました。ありがとうに対して、こちらこそというニュアンスが含まれる“Sama sama”は、とても素敵な言葉だと感じました。現地の人たちの、どこかわいらしさを持つ“Sama sama”の声の響きは、今でも頭に残っています。

Siapa namamu? お名前は?

コミュニケーションのきっかけとして何度も使った言葉です。学校訪問でお互いに初対面のなか、名前を聞いてカタカナのネームプレートを作って渡したとき、デモで学校が閉鎖になり、代わりに私たちの滞在先に見学に来てきたインドネシアの高校生たちとインドネシア語で名前を紹介しあったとき、お互いの雰囲気柔らかくなったように感じました。文化が違って、相手の名前を大事にして呼ぶことは、素敵なことなのだと感じさせられました。

Terima kasih atas makanannya ごちそうさまでした

朝昼晩、みんなで囲んだご飯の思い出が蘇ってくる言葉です。料理の名前を知ったり、サンバル(辛い調味料)に悶絶しながらも病みつきになったり、手で食べる方法に挑戦したり、朝から揚げ物のたっぷりのご飯を食べたりと毎食が印象に残るもので、もう一度味わいたい料理もたくさんあります。何よりも、ごちそうさまのたびにみんなが少しずつ“Terima kasih atas makanannya”が言えるようになっていて、そこから「makan=食べる」まで知ることができて、やはり言葉は面白いし知れば知るほど楽しいものだ実感しました。

ワークキャンプを通じて覚えたインドネシア語はほんのわずかですが、そこから多くの興味が生まれ、コミュニケーションの楽しさの発見につながったと思っています。何よりも、言語の面白さや重要性について身に染みて実感しました。世界の文化は場所や人によってそれぞれ違い、中には怖く見えるものや対立を生んでしまうような文化や考え方もあります(実際にイスラム教

も、ワークキャンプ前は未知の存在で少し不安もありました。)が、実際に相手の文化や生活に飛び込むなど、知ってみることで理解がしやすくなると思います。そして、いろいろな言語を学ぶことはその入口なのかなと感じています。今は技術が発展し、高性能な翻訳機が気軽に使えて、異文化コミュニケーションにおいて言語の壁は低くなっているかもしれないけれど、挨拶でも簡単な質問でも、何か一つ相手の国の言葉を自分の口から伝えることが大切なのではないかと感じました。私は将来学校の先生を目指していて「何のために勉強が必要なのだろう」と考えることもあるけれど、その答えもここにつながってくるような気がします。知ることによって、自分の考えが変わったり世界が広がったりする。その入口の一つとして、学校での勉強があるのかなと感じました。これからは、もっとたくさんの文化を知って、体験して、様々な言語に挑戦していきたいです。今回の派遣に参加できたこと、そして出会いに、感謝しています。

suka sekali sama Indonesia!
インドネシア大好き!

Backpack? or Suitcase?

約10日間のワークキャンプにバックパックで行く?
それともスーツケース? 2つを比べてみました!

バックパック

〈メリット〉
悪路でも動きやすい
(国によって道が悪い場合あり)

〈デメリット〉
最低限の荷物にしないと
入らない、重い



スーツケース

〈メリット〉
荷物の整理がしやすい
たくさん入る

〈デメリット〉
悪路では転がりにくい



荷物の中身は?

- ・洋服
- ・洗面用具
- ・トイレットペーパー
- ・日本食(お米、小豆)
- ・寝袋
- ・洗濯紐/ハンガー
- ・お菓子
- ・けん玉 など
- ・マットレス





たなか いほき
田中 依歩希

趣味はバスケットボール。インドネシアでも子どもたちとたくさん体を動かせてとても楽しかったです！



人とのつながり、世界のひろがり

私は医師となることを志しており、公衆衛生の観点から今回のワークキャンプのゴミ拾いというテーマに関心を持ったことが、このワークキャンプに参加するきっかけでした。また、異なる文化や生活環境の中に飛び込んで実際に体験できるワークキャンプという形態に惹かれました。今回のワークキャンプを通して、自分の医師としての将来に生きる学びだけでなく、一人の人間として大きく成長するきっかけを得ることができました。

まず、私が出た大きな成長はコミュニケーションに關することです。インドネシアでは、普段はもちろんインドネシア語で会話が行われていますが、インドネシア語はあいさつ程度しかできないので、現地の人とのコミュニケーションは難しかったです。ですが、現地の高校生以上の大人たちはある程度の英語が話せたので、なんとかコミュニケーションを取ることができました。ただ、私自身も流ちょうに英語が喋れるかといえば、自信はなかったし、普段英語で日常的に会話をする機会というのは滅多に無いので、ワークキャンプの初めのほうは、少し英語で話しかけるのに、抵抗やためらいがありました。

そんな中、大きく意識が変わったきっかけが、現地の人たちが英語を学ぶ授業に参加したこと。現地の人々もネイティブスピーカーではないので、大人たちが集まって英語の先生に授業をしてもらって勉強していました。ワークキャンプのプログラムではないですが、現地の人に誘っていただきその英語の授業と一緒に参加さ

せてもらったことがありました。その授業の中で、インドネシアの人たちは躊躇なく積極的に英語を使って話しかけてくれて、日本のことについて尋ねてくれたり、ジョークを飛ばしたりしてくれて、私は現地の人との心の距離がぐっと縮まったように感じました。今思えば、日本語を母国語とする日本人とインドネシア語を話すインドネシア人が、母国語ではない英語で会話しているので、お互い言いたいことがすべて伝えられているわけではなかったと思います。ですが、会話できるだけでここまで親しくなれるのだと気づき、言語を学ぶ意義を痛感しました。また、この授業の経験から、英語で話しかけることへの抵抗がかなり減って、文法などを気にしすぎず、積極的にコミュニケーションを取れるようになったと思います。

また、今回のワークキャンプを通して学んだのは、国境を越えたコミュニケーションだけではありません。ワークキャンプの前半、団員同士のコミュニケーションが圧倒的に不足していました。私自身も、自分のことで手いっぱいチーム全体のことを気に掛ける余裕がなかったです。団員同士、お互いがどう考えているのか、ワークキャンプの生活で何を感じ、不安に思っているかの共有が全くできていませんでした。その結果、Japanese Dayの前日になっても、正直言って準備が不足しているのは明らかだったのに、何とかなるだろうという雰囲気になっていました。

そこで、大竹さんが前日の夜に喝を入れてくださいました。これをきっかけに、その夜、団員同士で感じていること、不安に思っていることを共有し、ここからどうすればよいか話し合いました。あの本音で語り合った時間は今回のワークキャンプの中でも最も印象に残っているシーンです。話し合いを通して、もっと活動に主体的、積極的に取り組む必要があると気づくことができ、Japanese Dayを成功させるという目標に向けてチームが一つになったと思います。その夜の準備のおかげでJapanese Dayは大成功に終わりました。チームとして

動くうえでコミュニケーションの重要性を思い知らされた出来事でした。しかし、本来はもっと早い段階で、自分たちで現状を把握し、動き出すべきだったと深く反省しています。私自身の余裕のなさや、楽観的過ぎる自分の甘さにも気づいた良い経験となりました。

ワークキャンプのメインの活動であるゴミ拾いでは、“当たり前”の違いを感じました。水面がゴミで埋め尽くされたチタルム川を初めて直接見たときは、写真で事前に見ていたにも関わらず、その光景に大きな衝撃を受けました。いざ拾ってみると、おかしやインスタント麺の包装、飲み物の容器といった身近なゴミばかりで、人間の習慣が作り出した光景なのだ改めて感じました。実際、現地の子どもがアイスを買って、袋を開け中身を取り出すと、その場に袋をポイ捨てしたのを見かけたのが印象に残っています。些細なことですが、日本ではあまり見ないことです。チタルム川のゴミは街のほうで捨てられ流れてきたものなので、目の前で捨てられたこの袋が直接的に川を汚しているわけではありませ

んが、こういうちょっとした日本とは違う当たり前があの川の現状につながるのだらうと思いました。そして、当たり前であるからこそ、根本的な解決が難しいのだと思います。環境問題の解決の難しさ、いちボランティアではどうすることもできない無力さを感じました。

また、今回のワークキャンプでイスラム教に対する理解が深まりました。1日5回のお祈りはまさに生活の一部となっており、インドネシアの生活はイスラム教と密接に結びついていると知りました。お祈りや断食といった義務や食べ物への制限などから、厳格で少し閉鎖的なイメージをもっていました。実際は、モスクを訪れるときも快く迎え入れてくださり、イスラムについて知ると、思いやりや調和を重んじる温かい教えだと気づきました。そのイスラム教が生活や価値観に根差していることは、インドネシア人の温かく明るい人柄にも影響しているのだらうと思います。異文化を恐れず、敬意をもって知ることで、自分の視野が大きく広がることを実感できました。

思い出の インドネシア料理

慣れない環境や暑さの中、私たちを支えたのはおいしいインドネシア料理！団員思い出の品を紹介！

ナシゴレン
インドネシア風チャーハン

**いろいろなおかずが
ご飯に添えられている
ナシパタン**

**定番メニュー！
おかずと食べるせんべい
クルブック**

**みんなのお気に入り
キャッサバ芋のコロッケ**

**揚げ豆腐の
タフ**
ヘルシーで食べ応えがある

**中はもちもち！
フリーデーに公園で食べた
センボル**

**さまざまな揚げ物
店でよく売られていました**





おぎょ
小木曾 さくら

動物大好き!自然大好き!
インドネシアは最高の場所
でした。



出合いが教えてくれた気づき

私は、異文化を肌で感じ、多様な考え方や広い視野を持った人間になりたいと思い、このワークキャンプに応募しました。そして、期待以上に、多様で貴重な経験をすることができました。

その中でも特に大きな学びとなったのは「人とつながり」についてです。

活動地に着いた初日、たくさんの現地の方々を温かく歓迎してくださいました。そして、緊張している私に対して一生懸命英語で話しかけてくれました。しかし、英語が苦手な私は上手く聞き取れず、話したいことや伝えたいことがあっても言葉にできませんでした。その悔しさやもどかしさから、自信をなくしてしまいました。正直、あの時は、これから約一週間やっていけるだろうか、笑顔で最終日を迎えられるだろうか、そんなことばかり考えていました。

そんな時に出会ったのが現地の小学生の子ども達でした。彼女らはまだ英語を上手く話すことも理解することもできませんでした。ですが、表情、身振り手振りを使って一生懸命コミュニケーションを取ろうとしてくれました。その姿を見た時、伝えたいという強い気持ちさえあれば人は分かり合えるのだと気づかされました。

そこから、少しずつ現地での生活や活動についても前向きに考えることができ、言語にとらわれず様々な方法で関わろうと工夫しました。現地の女の子たちと

は、インドネシアで流行っているダンスを踊ったり、日本が大好きだといってくれた男性には折り紙で手裏剣を折ってプレゼントしたりしました。相手に合わせた工夫をすることで、より深く仲良くなることができ、かけがえない友人関係が生まれました。今でも毎日連絡を取り合っており、お互いの国の文化、帰国後のそれぞれの活動について話したり、子ども達とはビデオ通話でインドネシア語、日本語を教え合ったり、時には恋バナなどもしています。

まさか10歳も年の離れた子どもたちから大切なことを学ぶとは思っていませんでした。予想外なことが起こるのもワークキャンプの醍醐味であり、素敵な部分だと実感しました。この経験を活かし、私も誰かの変わるきっかけ、力になりたいと強く思いました。

そして、何よりワークキャンプに参加して本当に良かったと思う一番の理由は、11人の大切な仲間に出会えたことです。4期メンバーは控えめな子が多く、仲を深めるのに少し時間がかかりました。でも、活動を重ねるうちに一人一人の個性が溢れ出し、良いところをたくさん発見することができました。誰一人欠けても、こんなに素晴らしいワークキャンプにはならなかったと思います。お互いに助け合い、笑い合う中で、「この時間がずっと続けばいいのに」と何度も感じました。11人で活動できたことは、私にとってかけがえない最高の思い出です。

ワークキャンプを通して、沢山の笑顔に出会うことができました。「感謝すること、感謝してもらえなことって、こんなに幸せなんだ」と心から実感しました。この経験から、私は「誰かの想いや目標を形にしたい」という大切な目標を持つようになりました。この目標に近づくためにも、これからも仲間と一緒に西尾市で様々な活動にチャレンジしていきます。



プトリ ナオミ

将来の夢は、外国人としての経験を活かし、同じ立場にある人を支えること!自分自身のルーツと向き合い、子どもたちに癒されました。



ワークキャンプでの挑戦と学び

私は、日本にルーツを持つインドネシア人です。日本で暮らしてきた期間が長く、これまではインドネシアと深く関わる機会はありませんでした。今回のワークキャンプでは、自分のルーツを改めて客観的に見つめ直し、異文化に対する理解を深めたいという思いから参加しました。また、将来は日本に暮らす外国人の生活支援に携わりたいと考えおり、そのためにも異なる文化や価値観を持つ人々と関わる経験をしたかったことも参加を決めた大きな理由です。

インドネシアには今回初めて派遣されるということもあり、出発前は生活や準備の不安に加え、実は自分の語学力にも不安がありました。私は普段インドネシア語を話す機会がほとんど無く、大学でも英語専攻のため、日本語を使う頻度が減っていました。そのため、派遣前は自分の語学力やコミュニケーション能力に自信がありませんでした。さらに、家族からも多くの注意を受け、不安を抱えての出発でした。

しかし、実際にインドネシアで現地の人々と触れてみると、みなさんフレンドリーで、私たちをとて温かく迎えてくれました。そうして、私は少しずつ不安な気持ちが無くなっていきました。コーディネーターの方々とも英語とインドネシアを交えて会話ができ、徐々に自分の語学力に自信が持てるようになりました。

派遣初日には、空港でパスポートを失くすという、まさかのハプニングを起こしてしまいました。幸い翌日には無事にパスポートを見つけることができ、活動に大きな支障はありませんでした。やすさんや大竹さんが一緒に動いてくださったことに本当に感謝しています。

また、活動中は時々通訳もしていました。久しぶりに人前でインドネシア語を話すことに戸惑いましたが、思い切ってやってみるとその場の勢いで何とか形にできました。私にとって通訳とは、目の前の「ぼんやりとしたイメージ」を言葉で「形」にして相手に伝える作業だと思っています。単なる語学力だけでなく、どのように伝えれば分かりやすいかを工夫する、表現力やコミュニケーション能力が求められる作業で、今回の経験を通してその難しさを実感すると同時に、今後は物事をより分かりやすく言語化する能力を高めていきたい気持ちになりました。



現地での日本文化紹介はワークキャンプでしかない大きな経験になりました。Japanese Dayでは浴衣や甚平の着付けを行い、小学校の訪問では折り紙やコマ、けん玉を紹介しました。どの企画も子どもたちがとても喜んで一緒に遊んでくれたことは、とても励みになりました。日本文化紹介の裏側では、準備が大変で徹夜することもありましたが、仲間と協力しながら進めるうちに絆が深まり、お互い信頼できる関係を築くことができました。



さらに、私たちが滞在した団体の取り組みにも強い感銘を受けました。たとえば、「Garbage Bank」では、ごみを持ち込むことで幼稚園の学費やクリニックの薬代と交換でき、生活支援と環境改善を同時に実現していました。また、プラスチックごみを建材に再利用したり、水草をハンディクラフトに活用したりする工夫もしています。これは本来政府が担うべき役割を地域が果たしており、持続可能な社会づくりのための、素晴らしい取り組みだと感じました。



こうした経験を通して、私自身の視野も大きく広がりました。当初は、他の日本人の4期メンバーに対し「インドネシアの文化に抵抗があるのでは」と不安がありました。しかし、そんな不安はすぐに消えました。積極的に学び、交流しようとするみんなの姿勢を見て、インドネシアの人々のフレンドリーさに改めて気づき、日本とは異なる価値観を持つインドネシアの魅力を改めて発見し、自分自身の偏見も減ったように思います。

このワークキャンプに参加して本当に良かったと感じています。多くの経験を通して自分自身を成長させる大変貴重な機会になりました。私自身を含め、西尾市にはインドネシア人が多く暮らしています。今後、私は日本とインドネシアの橋渡しとなり、日本人とインドネシア人を支援する存在になりたいと思っています。そして、日本で誰もが安心して平和に暮らせるように、少しでも周囲の偏見がなくなることを心から願っています。



おおば りょうや
大葉 凌也

好きなインドネシア料理はナシバダン!!次はトゥブラン(フィリピン)に行くよ!!



成長とは...

「あと、1週間滞在出来たら…」飛行機がインドネシアの空港を飛び立つときに思いました。

別に後悔があったわけでも、不完全燃焼だったわけでもないですが、ただ純粋にこの4期のメンバーと一緒にもっといろんなことを経験したいと思ったのです。

この旅を通して、自分の中にある「当たり前」が大きく変わりました。派遣先では、浴槽も暖かいシャワーも無い。ベッドもなければエアコンや冷蔵庫も無い。今まで生きてきておそらく最も過酷な環境で生活していたと思います。本当に貴重な経験をさせてもらいましたし、どんなに辛くても、時にぶつかっても、最後はすべて「爆笑」に変えてくれる素敵な仲間がいたから乗り越えられました。みんな本当にありがとう。そして、とても心配そうでしたが、送り出してくれた両親にも感謝しきれません。改めて、自分は一人では生きていけないと実感し、周りに感謝して生きていこうと思えた素敵な旅でした。

さて、本題に入ります。僕は派遣初日の目標決めの時に「自分に素直に」という目標を立てました。自分がやってみたいと思ったことはすべて挑戦し、やり切る。失敗したら笑えればいいや。そんなマインドで過ごそうと決めていました。日本に住んでいると周りの顔色をついつい気にしてしまいがちですが、ここでもそんなことをしていたら勿体ない。寝ずにオールでモスクに行ったり、現地の方と深夜まで語り合ったりなど、生活している中で

直面するすべての出来事が新鮮でおもしろく、寝ているのがもったいないと感じるほどでした。そんな生活をしていくなかで、自身の考え方について大きな変化と学びがありました。

1つ目は、「迷いやためらう=成長するチャンス」です。僕は高校時代にタイのバンコクに派遣で行ってきましたが、英語力に自信は無く、ノリと勢いでなんとかするタイプでした。しかし、もっとスムーズに英語で話したいと思うようになり、上達させるには、話さないと考えていました。そこで、私は空港での待ち時間、キャンプでのフリータイムや夜の就寝前などでカタコトですが話しかけるように心がけていました。周りには何しているのだろうと思われていたかもしれません。知り合いでもない、ただ空港で隣のベンチに座っていた人に話しかけるなんて普通はしないと思います。でも、自分が「英語をもっと話せるようになりたい」と素直になって動いた結果、英語で1日の振り返りを堂々と話せるようになったり、英語を話すことに対する障壁が無くなりました。自分が「こうなりたい」と思ったなら、その思いに素直になって愚直に行動する。シンプルだけど意外と出来ていないこと。これが、何かを成し遂げたいと思った時に大切にすべきことだと思いました。

2つ目は「偏見を持ちすぎない」ことです。ワークキャンプを通して、偏見を持ちすぎずに広い視野で物事に取り組むことを心がけていました。なぜなら、過度な偏見を持っていると損をすると感じたからです。みなさんは「イスラム教」に対してどんな印象をお持ちですか？宗教に対して過激で物騒な印象を抱いている人もいます。僕も以前まではそうでしたが、イスラム教徒である現地の方々と交流し、イスラムの話や本場のモスクでの礼拝の仕方、その歴史的背景や起源の話を知ると、自分のイメージとは全く異なるものでした。初めて行ったモスクでは、見ず知らずの外国人で

ある私たちがいきなり礼拝に参加したにも関わらず、ジュスチャーや合図でやり方を教えてくれました。現地の方との話の中で、「普段何を信じていようが、イスラムの文化を知りたいと思ってくれた人には寄り添うのは当たり前だよ」と、「多くのイスラム教徒は、他の文化を迫害もしないし、拒否することも無い。だから誤解しないで欲しい」と言われました。自分は今までもったいないことをしていたと感じました。

今まではニュースなどの報道を信じ込み「イスラム教=怖い」という印象を勝手に持って、あまり関わろうとせずしてきませんでした。偏見を持つことがいけないとは思いませんし、偏見は自分の身を守ることもあると思います。その反面、自分の可能性や自身の生活に見出せる面白さに自分で制限をかけてしまう可能性があると感じました。僕はリスクがあると分かっているけど、「おもしろそう!」と思った事にすぐチャレンジできる大人になろうと思います。その方が絶対に人生が楽しくなるし後悔しない。失敗したら笑えればいい。

最後に、派遣前後で明確に自分の中で変わったものがあります。それは、「素直さ」です。自分がやりたいと思ったことは、迷わずやってみる。失敗したら...と考えるのは後回しで、「やってみよう」と思ったならその気持ちに従うことが結果的に物事を成功に持って行く秘訣だと思います。今回の旅を通して、「価値観が変わった」などの言葉では言い表せないほど、自分の中にある当たり前や概念が変わったと思います。でも、この気づきを自分で思っているだけじゃもったいない。

同じように海外に興味のある学生や、何かに挑戦してみたい人にこの体験記を読んでもらいたい。その結果、少しでも「海外に行くって面白いなあ」と思ってもらえたら幸いです。この企画を支援してくださった西尾市に感謝し、自分の行動をもってたくさんの方に恩返ししていこうと思います。Terima kasih!!(ありがとう)





つげ だいすけ
柘植 大介

初の海外経験がインドネシアでした。貴重な経験を通じてひと回り成長できました。

すべての出会いに terima kasih

私がこのワークキャンプに応募した理由は、大学生のうち一度は海外へ行ってみたいという、きわめてシンプルなものでした。しかし、実際に参加してみると、ただの旅では決して得られない、そして今後の人生でもなかなか体験できないような貴重な経験を数多く積むことができました。

このワークキャンプで最も心に残っているのは、現地の子どもたちとの交流です。インドネシアの子どもたちは、私が想像していた以上に人懐っこく、いつも瞳をキラキラと輝かせていました。施設に到着したその日から、サッカーなど遊びを通じてすぐに打ち解けることができ、言葉が完全に通じなくても、笑顔や身振り手振りで心がつながる瞬間が何度もありました。そのたびに、人と人が分かり合うのに言語は必ずしも必要ではないと実感しました。

特に印象的だったのは、Japanese Dayで行ったうちわ作りや、小学校での折り紙体験です。子どもたちは日本の文化に強い興味を示し、夢中になって取り組んでくれました。完成した作品を嬉しそうに見せてくれる姿は、今でも鮮明に覚えています。また、Japanese Dayで出会った子どもたちの中には、その場限りで終わらず、WhatsApp(日本でいうLINEにあたるアプリ)で連絡先を交換した子もいます。帰国後も頻繁にビデオ通話をしており、国境を越えて交流が続いていることは、私にとって大きな財産となりました。短い滞在ではありまし

たが、多くの子どもたちと心を通わせ、生きる活力や前向きなエネルギーをもらうことができたと感じています。



さらに、インドネシアならではの文化や宗教にも触れることができました。特に印象深かったのは、イスラム教徒が多い国ならではのモスクでの礼拝体験です。モスクに足を踏み入れた瞬間、その独特で神聖な雰囲気に圧倒されました。イスラム教では1日5回の礼拝が定められており、最も早い礼拝は朝の4時半から始まります。私も実際にその時間に参加しましたが、まだ外は薄暗く眠気の残る時間にもかかわらず、多くの人々が真剣に祈りを捧げていました。その姿から、イスラム教が人々の生活の一部として深く根付き、非常に大切にされていることを強く感じました。

こうした日常に息づく文化や信仰、価値観に直接触れられたのは、ワークキャンプならではの大きな魅力だと思います。観光で訪れるだけでは決して得られない暮らしに寄り添う体験を通して、インドネシアの人々の温かさや文化の奥深さを肌で感じることができました。今回の経験は、単なる異文化交流を超えて、私の世界観を広げるかけがえのない財産になりました。

最後に、このワークキャンプを通じて出会った仲間たち、そして私たちを受け入れてくださった現地のコーディネーターの方々をはじめ、インドネシアで出会ったすべての方々に、心からの **Terima kasih!!** (ありがとう) を伝えたいです。



おおたけ みすず
大竹 美鈴

西尾市役所 市民部
地域つながり課 主事

国際ワークキャンプ、合宿型の国際ボランティア、海外派遣・・・これらの言葉を聞いても、1年前、担当1年目だった自分は、この事業が多文化共生事業であることが理解できませんでした。多文化共生ではなく、国際交流、国際協力の分野ではないか、そんな気がしたからです。たった10日間で何が得られるのか、現地の方々と交流して、異文化に触れて、そして帰国する。正直なところ、どんな成果が出せるのか不安に思っていました。

私は、市の多文化共生担当として日頃から外国籍住民の方々、地域の方々、企業の方々と接する機会があります。聞こえてくるのは「外国人がうるさい」「外国人がルールを守らない」「日本人に差別的なことを言われた」などの住民同士のトラブルであることが多いです。市が支援できることもあれば、

できないこともあり、いつも不甲斐なく感じていました。

しかし、そんなマイナスな考えは、今回訪れたインドネシアの活動地1日目の夜に覆されました。薄暗い中、通り過ぎりの小さな子どもたちが、私たち日本人グループの元へ近づいてきました。コマを差し出すと、子どもたちはその場で遊び始めました。子どもたちの笑顔を見た瞬間、言葉では説明できない思いが込み上げてきて、涙が溢れそうになりました。

引率として参加したインドネシアでの約10日間のワークキャンプ中、活動地はもちろん、空港、タクシー車内、電車の駅、どこへ行っても差別的な対応をされることはありませんでした。毎日笑顔で「Pagi!」(おはよう)と挨拶してくれる子どもたち。こんな光景は残念ながら日本では見ることはできないと思います。でも、西尾市ならできのではないかと、ワークキャンプで派遣された青年たちが西尾市を、そして日本を変えてくれるのではないかと、そんな夢みたいなのが叶うのではないかと。ワークキャンプは、たったの10日間で私をそんな気持ちに変えてくれました。

最後に、この事業に応募しワークキャンプに一生懸命向き合ってくれた9名の団員、派遣前から私たち第4期のサポートをしてくださった過去の派遣団員の皆様、そして、派遣団を温かく支えてくださったNICE井口様に心から感謝を申し上げます。西尾市青年国際ワークキャンプ派遣事業は、西尾市の代表すべき多文化共生事業です。西尾市は、外国人と日本人が笑顔で「おはよう!」と挨拶できるまちを目指してまいります。



いくち やすのり
井口 育紀

特定非営利活動法人NICE
(日本国際ワークキャンプセンター)

第4回目の派遣事業は、インドネシアでの開催となりました。皆さんにとってインドネシアという国は『未知なる国』でしょうか?それとも『身近な国』でしょうか?今回は、事前研修で西尾市にあるモスク(イスラム教徒がお祈りする場所)を訪問し、モスクを訪れていた方々と一緒に食事を通じた交流会がありました。団員からは「モスクがあることは知っていたが、今まで来たことがなかった」、「少し怖いイメージがあったけど、実際に交流することで全く違うイメージをもった」などの声がありました。

活動先では、モスクに行って地域住民の方々と一緒に祈りをしたり、小学校訪問では日本文化紹介を行ったり、人懐っこい小学生達と交流したり、夜な夜な同年代の若者達と語り合ったり、インドネシアのゴミの現状を学ぶだけでなく実際に解決に向けて取り組んだり——。インドネシアに実際に行かなければ知り得なかったこと、行ったからこそ得られた経験がたくさんあったことでしょう。

今回の団員9名は、ワークキャンプを通して、活動地に約10日間どっぷり浸かって、インドネシアという国が『未知なる国』から『身近な国』へと変わったのではないかと思います。西尾市には多くの外国籍の方々の方が住まわれています。国が違えば考え方や生活スタイルも変わり、トラブルも否めません。世間では外国人排斥、そして分断の動きもあります。多文化共生社会をつくっていくには、いかに相手のことを自分事や身近に思えるか。それが始めの一歩だと思います。今回のワークキャンプを通して、団員がインドネシアを、外国人を身近に感じ、人種や国籍を越え、それぞれが尊重し助けあっていく社会をつくる担い手になってくれることを願っています。

